

視覚言語の教材について

— シンガポールの教科書を事例に —

阿部 萌*・福田 隆眞・佐々木 宰**

On the Visual Language as the Learning Materials in Art Education
—A case of art textbooks in Singapore—

ABE Moe*, FUKUDA Takamasa and SASAKI Tsukasa**

(Received January 10, 2012)

キーワード：視覚言語、美術教育、共通事項、シンガポール

はじめに

我が国の教育課程は平成20年に改訂され平成23年からは完全実施となった。美術教育においては、改訂の特徴のひとつとして視覚言語を意識させる〔共通事項〕が導入された。

視覚言語を美術教育の基礎とする考え方は1920年代のバウハウスから始まり専門教育から普通教育に導入された。また、戦後においてはデザイン教育の振興に伴って昭和30年代、40年代にはデザインの基礎的学習として視覚言語そのものを教材としたこともあった。

現在では視覚言語は造形全般の基礎と捉えられており、表現と鑑賞の活動の中に含まれて学習するようになっている。

本稿ではまず、学習指導要領における〔共通事項〕を紹介し、それらと関連していると考えられるシンガポールの教材について2000年と2009年の教科書について述べる。そして、美術教育における視覚言語の果たす役割について考察する。

1. 平成20年学習指導要領の共通事項について

平成20年の小学校図画工作科、中学校美術科の学習指導要領の改訂において、〔共通事項〕が新設された。図画工作科・美術科は表現と鑑賞の2領域からなっているが、この〔共通事項〕は、表現と鑑賞の各活動において共通に必要な資質や能力を示しているものである。自分の感覚や活動を通して、形や色などの造形要素、動きや奥行きなどの視覚言語の造形的な特徴を捉えること、イメージの形成を促すような指導が大切である。発想や構想と、イメージの形成が美術教育の基礎であり、その基礎を培おうとするものが〔共通事項〕であるといえる。

1-1 小学校図画工作科での共通事項

小学校図画工作科の学習指導要領では共通事項が次のように示されている。第1学年及び第2学年では、「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色などをとらえること。 イ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。」としている。第3学年及び第4学年では「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、組合せなどの感じをとらえること。 イ 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。」となっている。さらに第5学年及び第6学年においては「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえること。 イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。」とし

*山口大学大学院教育学研究科修士課程美術教育専修 **北海道教育大学釧路校

ており、第1学年から第6学年までを通じて、図画工作の表現媒体である造形要素の色や形と自分のイメージを結びつけるための方法として、視覚言語との関連を段階的に取り扱っているといえる。感覚を通して捉えるということは、視覚による色や形だけでなく、触角や皮膚感覚による材質感や、湿度のような空気の感覚や雰囲気までも捉えようとするのである。日本語は豊かな擬音語、擬態語をもっている。「ザラザラ」「ツルツル」「ピカピカ」「ベタベタ」「しっとり」「むしむし」などのようにテクスチャーや周りの空気感覚までもイメージする言葉がたくさん存在している。これらは色や形で表現したり、鑑賞によって色や形を受容し理解したりしながら、イメージの形成に役立つものである。

1-2 中学校美術科での共通事項

次に、中学校美術科での共通事項は、第3学年まで同じで「ア 形や色彩、材料、光などの性質やそれらがもたらす感情を理解すること。イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。」と定めている。小学校図画工作科で修得した造形要素や視覚言語は、戦前の構成教育運動や戦後の狭義のデザイン教育の方法で捉えられた知性や方法論に偏った幾何学的、抽象的な表現として捉えるのではなく、表現のための要素や方法が人間の感情と結びついて、豊かな美術表現をするための方法として設定されていると理解できる。

中学校において美術作品を制作したり鑑賞したりすることは豊かな感情を育み、情操教育としての役割を担うことができる。そこには形や色、材質のもつさまざまな感情があり、絵画やデザインの構成や立体作品のもつ空間感、CGによる非現実のイメージなど多様な表現形式の特性が感覚や感情を豊かにすると考えられる。

1-3 視覚言語の取り扱い

視覚言語の構造を使って美術教育を進めることは、バウハウス以後、専門教育だけでなく小中学校においても明快な方法として受け入れられた。わが国の戦前の造形性を重視する形象図画教育や構成教育運動、構作教育などに見られ、戦後では造形教育センターの活動や昭和30年代からのデザイン教育の方法に見ることができる。

この教育については賛否両論がある。知的に先行し過ぎるとか、幾何学的なものや抽象的なものになりやすいなどの批判もあり、逆に基礎的・基本的な造形の特徴を修得できるという利点もある。バウハウスが行った視覚言語の系統化はデザインの分野で発揮されたことから、デザインの基礎と捉えられているが、造形要素の活用は美術全般に機能する方法である。

2. 2000年のシンガポール美術教科書にみられる視覚言語

前章では我が国の美術教育課程における視覚言語について述べた。ここでは視覚言語による美術教育の教材を重視しているシンガポールの中高等教育の美術教科書を取りあげて教材について述べる。本章では2000年の例を述べ、次章で2009年の事例を述べる。

2000年のシンガポール美術教科書“EYE FOR ART Visual Arts for Secondary One”^(注1)は、生徒の興味や関心に基づいたテーマ別の構成がされており、テーマからイメージを膨らませ、研究や作品化を行うという形である。「美術制作」「造形要素と造形原理」「美術の形」「人々」「オブジェ」「経験」「伝統」「環境」の8つのテーマのうち、視覚言語の内容は「造形要素とデザインの原理」のテーマ内で大きく扱われている。

「造形要素と造形原理」について、教科書の文章を以下に紹介する。

2-1 造形要素

造形要素はどのような作品においても基本的な部分であり、要素を組み合わせ構成することで、他者に考えや感情を伝達する効果がある。

造形要素は、線、形体、形態、明度(色調)、色、材質感(テクスチュア)、空間である。

・線 (Line)

描く、印刷する、切り込みを入れることによって作ることができる。

線には様々な種類がある。太い、細い、水平、垂直、対角線、ジグザグ、螺旋、壊れたような線、曲がった線など。これらの線の表現でメッセージを伝えることができる。たとえば、垂線は構成にバランスを作りだしたり、細い線はデリケートで壊れやすい印象を与えたりする。

- 形体 (Shape)

対象の主な特徴・印象を作り出す。形は、線、色、材質感、空間のような他の造形要素によって構成されている要素である。

形のなかには幾何学的なものもあり、そのもっとも単純な例は円形、正方形、長方形や楕円形である。手や足など、一般に多くの形が有機的なものである。

単純な形は視覚的に強いメッセージ性をもつのでシンボルマークなどに用いられる。

形は配色によって異なった印象を生み出すことができる。形は色彩によって構成され、また色彩によってさまざまな視覚効果を作り出すことができる。

- 形態 (Form)

物体の三次元的な形状のことを指す。広義では、物体の物理的な特徴のことだと言える。

例えば三次元的な形に置き換えると、円形は球形、正方形は立方体になる。有機的なフォルムを言葉で説明するのは難しいが、「手のような形」「木の形」「なだらかで曲線的な形」というような記述的な表現もよく使われている。実物に触ることによってその形についてより多くのことを感じ取れる。

- 明度 (色調) (Value)

三次元は色価や色調と呼ばれる造形要素を用いることによってつくられる。それらは色や面の明暗を表現している。色調や色価は、さらにクロスハッチング、点描、混色、拓本などの技法を用いることで三次元の感覚を作ることが可能である。

- 色 (Colour)

色は叙述的、叙情的な特徴をどちらとも有しており、それによって異なる気分や雰囲気を作ることが可能である。色相環は色の関係を理解するのに役立つ、赤・青・黄色は原色として知られている。原色は混色によっては生み出せない。混色については、赤+黄色=オレンジ、赤+青=紫、黄色+青=緑など具体例が挙げられている。

色は表現の特性によって分類が可能である。よく知られているものとしては、赤、橙、黄色のような暖色は暖かさや調和、怒りなどの感覚を生み出し、青、青緑、紫などといった寒色は新鮮さ、涼しさ、悲しみなどの感覚を生み出すというものがある。

- 材質感 (Texture)

テクスチャは表面の質や感触のことである。ざらざら、すべすべ、輝いている、とがっている、でこぼこしている、毛でおおわれている、などが挙げられる。自然の中には多様なテクスチャが存在している。作品にするときには、テクスチャをそのまま利用する場合と、似せて描いたり刻みこんだりする場合とがある。

- 空間 (Space)

空間とは、あるものの周りや上下、内側の距離や領域を指し、芸術作品においては平面的、立体的のどちらも考えられる。また、遠近法やものの重なりを利用することで、より空間を印象づけることが可能である。

2-2 造形原理

造形原理は、造形要素の組み合わせをまとめた決まりのことである。造形原理としてバランス、ハーモニー、コントラスト、リズム、ドミナンス、リピテーションが挙げられている。

- バランス (Balance)

バランスは様々なタイプがあるが、画面の重さによって見ることができる。明るいトーンは上にあり、暗いトーンが下にあるというような例である。また、シンメトリーやアシンメトリーのバランスも考えられる。

- ハーモニー (Harmony)

ハーモニーは、質的に類似したものが画面に存在することによって成り立つ。それは、バランスとも関連している。また、線や色やテクスチャなどの造形要素を限定することでハーモニーを表現することができる。

できる。

- コントラスト(Contrast)

コントラストは質的に異なったものの組合せである。コントラストは画面に緊張感を生み出し、見る者を注目させる。

- リズム(Rhythm)

リズムは、動きと関連している。リズムは一つの形から次の形に次第に変化する、あるいは一つの方向から別の方向に変わっていく、というような状態を表す。

- ドミナンス(Dominance)

ドミナンスはあるものを他のものから目立たせる役割をもっている。ドミナンスは線や方向、大きさなどによって表現することができる。

- リピテーション(Repetition)

リピテーションは類似した要素をグルーピングすることで生まれる。例えば動きのあるイメージを統一するような役割をもっている。

3. 新しいシンガポール美術教科書

シンガポールは2009年に新たに教育課程を改訂し、教科書も刷新された。^(注2)新しい教科書では視覚言語の領域が拡大され、美術教育の基礎的な位置づけとされている。本章では全体目次を紹介して視覚言語の具体的な教材を述べる。

3-1 教科書目次

Part 1 美術とはどんなもの？	Part2 生活の中の美術(p. 100)
Unit 1 美術入門(p. 1)	Unit4 美術と創造力(p. 101)
1.1 美術とは…(pp. 2-9)	4.1 ひらめきと芸術家(pp. 102-106)
1.2 美術を鑑賞しよう(pp. 10-15)	4.2 視覚的な日記を使おう(pp. 107-111)
単元まとめ(p. 16)	単元まとめ(p. 112)
Unit2 美術の要素(p. 17)	Unit5 絵と自分(p. 113)
2.1 たくさんの色(pp. 18-23)	5.1 自分とアイデンティティ(pp. 114-120)
2.2 点で遊ぼう(pp. 24-28)	5.2 自分とそれ以外の人たち(pp. 121-127)
2.3 線の動き(pp. 29-34)	単元まとめ(p. 128)
2.4 質感を触ろう(pp. 35-39)	Unit6 絵と人々(p. 129)
2.5 形をつくろう(pp. 40-46)	6.1 私たちの歴史(pp. 130-136)
2.6 形態について(pp. 47-51)	6.2 私たちの周囲の自然環境(pp. 137-143)
2.7 失われた空間(pp. 52-57)	6.3 私たちの伝統(pp. 144-152)
単元まとめ(p. 58)	6.4 私たちの国民性(pp. 153-159)
Unit3 デザインの原理(p. 59)	6.5 美術の将来(pp. 160-166)
3.1 大きさと比率(pp. 60-65)	単元まとめ(p. 167)
3.2 繰り返しの絵(pp. 66-71)	アイディアから作品ができるまで(pp. 168-172)
3.3 リズムによってできる動き(pp. 72-77)	実際の活動のための素材リスト(pp. 173-177)
3.4 もののバランス(pp. 78-83)	用語解説(pp. 178-182)
3.5 芸術の多様性(pp. 84-87)	謝辞(pp. 183-184)
3.6 見せ場(強調点)を作ろう(pp. 88-91)	
3.7 みんなで統一(pp. 92-98)	
単元まとめ(p. 99)	

以上が教科書の目次であるが、全体184ページのうち、Part1にあたる約半数のページが視覚言語(基礎)で占められているということがみてとれる。Part2の部分は2000年の教科書と同じようにテーマ別の構成となっている。

また、図版には日本の浮世絵を入れていたり、地元作家も載っていたりする。

3-2 造形要素

教科書のこの章では造形要素を解説している。具体的には点、線、形体、形態、色彩、テクスチャ、空間の7つを取り上げている。(図1)

図2では、コンピュータによる色彩の学習を行っている。デジタルカメラとコンピュータによって色の変換や装飾などが簡単にでき、デジタル教材の特色を生かしている。

図3は、点の学習の例である。点描派のスーラを紹介して色彩の視覚混合や印刷の原理を説明している。また、点は具体的な量をもっていないが、視覚的な点を把握するための解説を行っている。

図4は、線の表現である。スケッチによる有機的な線や建築の幾何学的な線を例示している。また、線は画面の中で方向を意味し、写真とスケッチによって線の方向や見えない線を説明している。

図5は、スニーカーのスケッチを例として線で描く色々な方法を解説している。ハッチングによる多様な表現や線のぼかしの技法を述べている。

図6は、テクスチャの種類を挙げている。テクスチャには視覚的なテクスチャと触覚的なテクスチャがある。絵画や平面のデザインや映像では、視覚的なテクスチャが使われる。立体作品では具体的に触角によるテクスチャが説明されている。

図7は、形体の遊びによって様々な形体の説明を行っている。ダリの超現実的な形の面白さや地と図の組み合わせによる形体の面白さや不思議さを述べている。

図8では、形体と形態の違いを説明するために形態では立体的な作品を示している。しかし、仮想空間としての形態の作品も紹介し、その面白さを例示している。

図9は、空間の不思議さを解説している。画面における素材は同じでも、その配置やサイズによって空間の占める大きさが変わって感じられる。

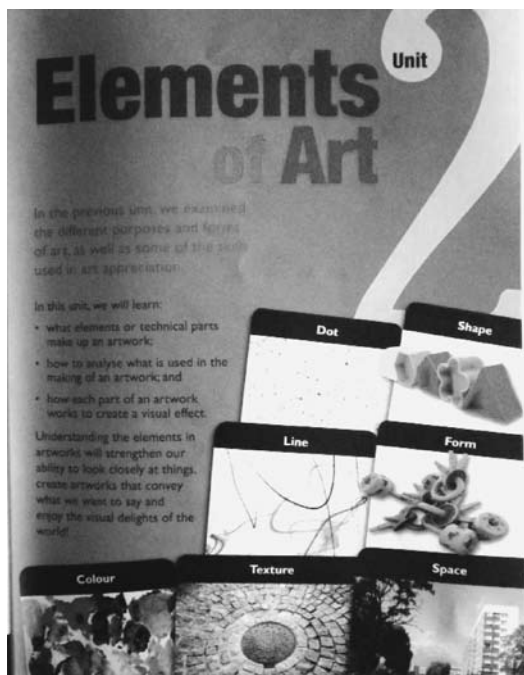


図1 造形要素の種類

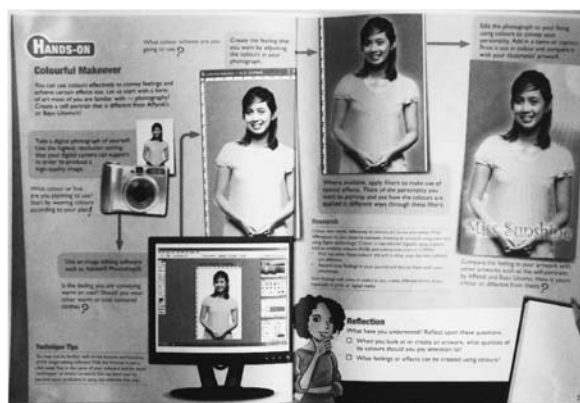


図2 コンピュータによる色彩

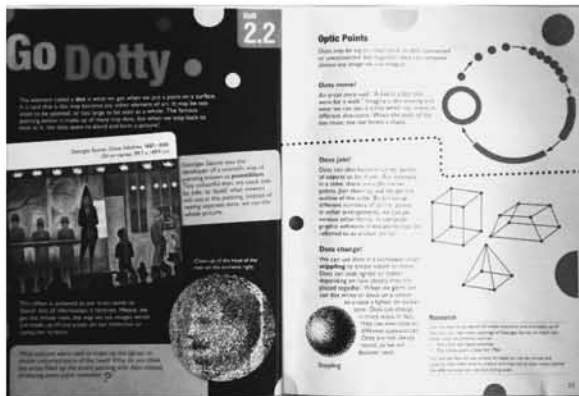


図3 点

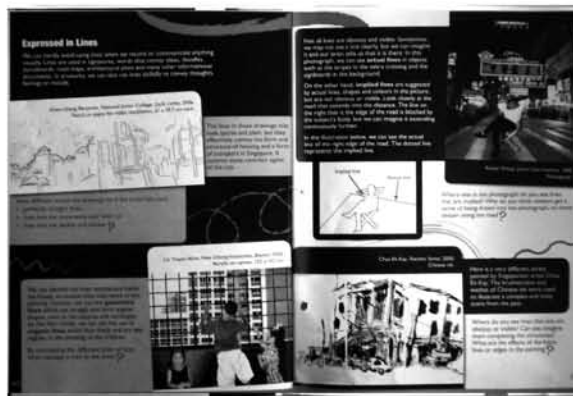


図4 線

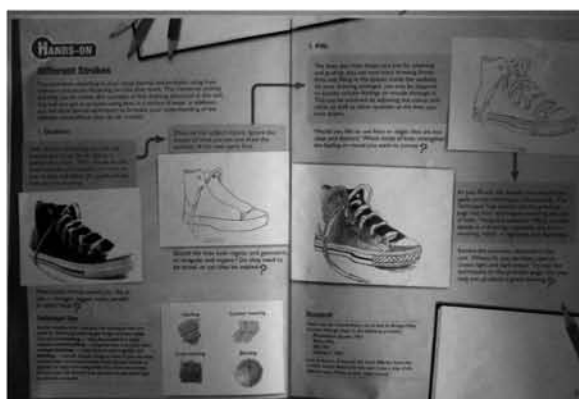


図5 いろいろな筆法の線

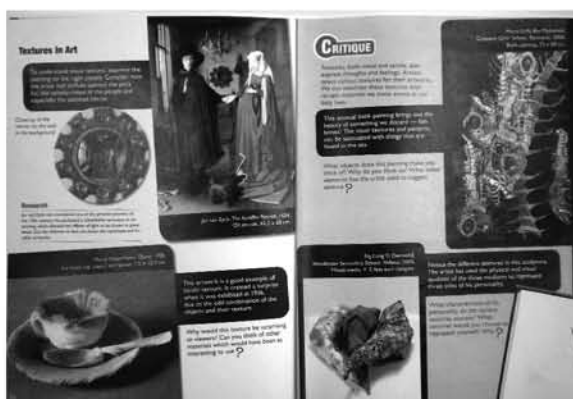


図6 テクスチャ



図7 形体で遊ぶ



図8 形態



図9 失われた空間

3-3 造形原理

ここでは造形の原理を扱っている。リズムと動き、強調、バランス、プロポーションとスケール、パターン、多様性と対比、統一と調和を紹介している。(図10)

図11では、サイズとプロポーションの関係を述べている。ジャコメッティのやせ細った人体の彫刻によってプロポーションを強調した例を述べている。また、マグリットの作品ではものの変化させ、非日常的な画面を作成している。

図12ではパターンのタイプを示している。繰り返しの中にパターンを見つける学習である。刺繍やイスラム文様やバティックの作品からパターンを見出している。

図13は、図12の規則的な繰り返しに対して、不規則なリズムや動きによって表現することを述べている。自然を描写した風景画に見られるリズムや動きを紹介している。また、アラブの壺の模様やコーランのカリグラフィーによって人為的なリズムと動きを説明している。

図14は、バランスについての説明である。バランスはシンメトリーとアシンメトリーの両方によって生み出される。左右対称の美しさのバランスと不對称のバランスの美しさの両者を認識する題材である。

図15は表現の多様性を扱っている。絵画や彫刻、コラージュ、バティックなど様々な表現の分野においてパターンやリズムやバランスを伴って多様な表現ができることを示している。

図16は、統一感の題材である。生活空間やモニュメント、フィギュアなどを例にして、統一感のもつ役割を示している。統一感とは多様性との関係によって成り立つ微妙な感覚である。

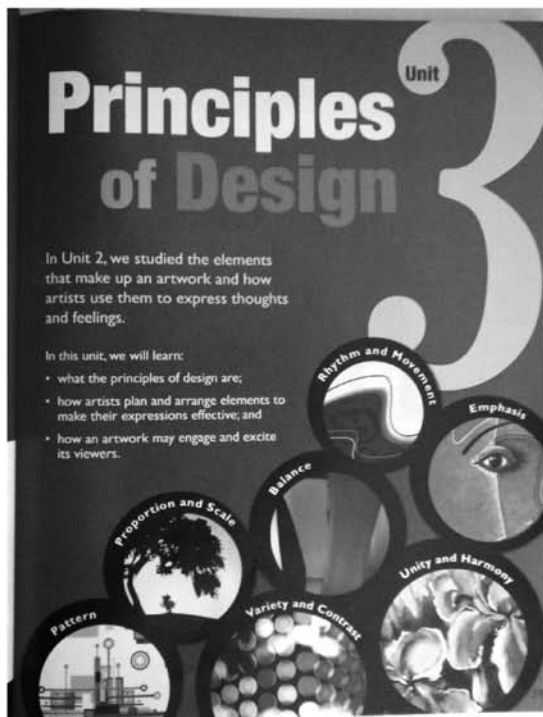


図10 造形原理の種類

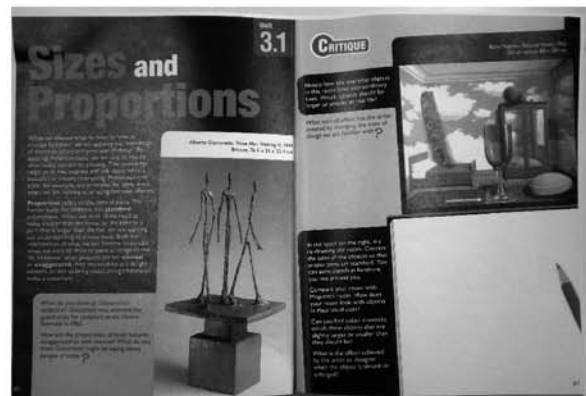


図11 サイズとプロポーション



図12 繰り返しの美術



図13 リズムと動き

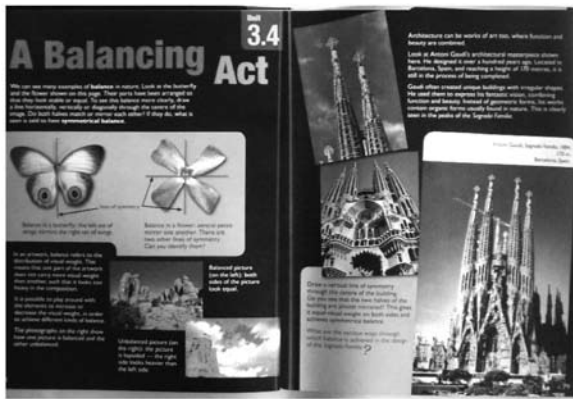


図14 バランス

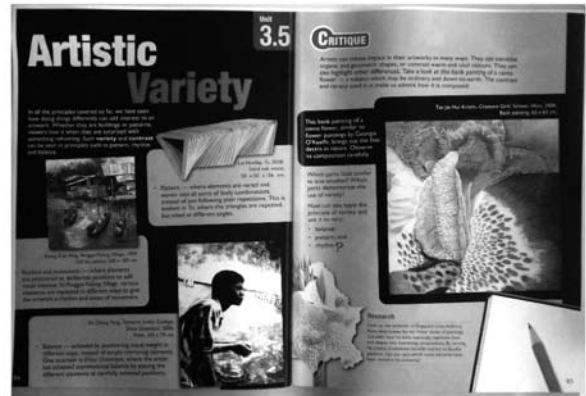


図15 多様性

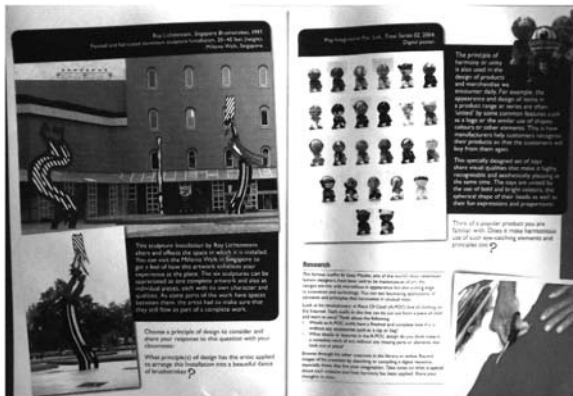


図16 統一感

4. まとめ

前章までに視覚言語の教材についてシンガポールを例にして述べた。シンガポールの中等教育においては、2000年以前は各民族の伝統文化の理解のための教材と視覚言語による美術の基礎の教材で構成されていた。2000年から2009年では、視覚言語の教材は少なくなりシンガポリアンとしての民族の統一と創造性が重視された。そのことによりテーマ別の題材が多くなり、環境、民族、人間、伝統などのテーマで創造する教材が試行された。しかし2009年の改訂では再び視覚言語が重視され、教材の半分を占めるようになった。同時に視覚言語の個々の題材のなかに多様な伝統文化も取り入れられ、2000年以前の民族文化とも関連している。我が国の新しい教育課程では、共通事項として色や形とイメージの学習が促されている。それは直接的に視覚言語を取り扱うのではなく、絵画や彫刻などの表現分野や表現の主題の中で視覚言語を取り扱うように促している。

つまり、シンガポールにおいては視覚言語から表現の多様性を促し、我が国においては表現の多様性の中に視覚言語をみつけるという関係が想定できる。いずれの方法においても視覚言語を美術教育のひとつの手段として捉えることによって、情意面だけの美術教育から学力としての美術の力を想定することができる。

付記

本研究は文部科学省科学研究費補助金(基盤研究 C)に基づくものである。研究課題：「アジア地域における美術教育課程の実質化調査研究」、代表者：福田隆眞、課題番号：20530826

シンガポールの新しい教科書は、2011年11月にシンガポール教育研究所のDr. Winston Angにより寄贈された。また、シンガポールの美術教育についての最新情報を提供された。

注

1 Imants Krumins, *EYE FOR ART Visual Arts for Secondary One*, Oxford University Press, Singapore, 2000.

2 Joash Moo, Frank Lee, *Art in Life Lower Secondary*, Peason Education South Asia, 2009.

图版出典

Joash Moo, Frank Lee, *Art in Life Lower Secondary*, Peason Education South Asia, 2009.